八幡山〔淀大橋より十町許にあり。此地は八幡宮御遷坐より北は大橋の南爪を限て悉く神領にして、橋爪に守護不入の標を建る。別名男山あるひは雄徳山とも書す、嶺を香呂峯又鳩嶺と称す。山下に民家十余町あり。此辺都会の地にして商家多し、委は前編に見へたり〕

八幡山十二景

徳山霊社　洛城瑞霞　石水清涼　醍醐霽月
天台積雪　淀橋斜照　狐川征帆　伏沢落鴈
難波滄浪　山崎暁鐘　嵯峨暮烟　朝山晴嵐

頼風塔〔八幡金剛寺前町人家の裏にあり、由縁前編に見へたり〕

達磨堂円福寺〔八幡志水町の南、高野街道の右にあり。禅宗にして、造営は近年天明三年より濫觴て、同五年に成就す。基此地は山城河内の境にして、八幡神領幣原村の内なり、西は楠葉にして細路八町許あり〕

寺説に曰、当宗の徒弟雲水遊歴の僧侶をあつめて、専禅定を修せんが為に、一尊宿出て発願せられ此地を寄附して伽藍の境地となし、又庵室一宇を施与するもあり、是より随喜補弼の緇徒おの〳〵築作の労に走り、山林を開き渓谷を埋み、仮に僧堂を設て一宇の禅刹とし、大応国師を開祖となしぬ。又一つの古蹟を得て、境地の西辺垂に堂舎を構へ、霊像の

地蔵尊を安じ、傍の室は四来の賓接とす。

達磨大師像〔境内の東、坐禅堂に安置す、原此尊像は大和国片岡山達磨寺にありしが、年経て兵乱の時八幡の郷に遷し秘蔵せり。近年此尊像に雄徳山円福寺といへる古号を添て感得せられ、こゝに再営す。むかし聖徳王片岡に行啓して、しなてるやの御詠あり、飢人いかるがやの返歌す、贈答世の知る所なればこゝに略す。太子還御の後、此飢人こそ達磨の化身なりと悟り、みづから此像を作り片岡に安じ、今に達磨寺と号す。大和名所図会に見へたり。愚按、上宮太子の御作の事未レ勘〕

長の松〔達磨堂の西、楠葉道の傍にあり、枝葉四方に繁茂して笠の如く蓋覆せり、長生の義より名づくるか〕

橋本〔八幡山の西南にあり、大坂街道の駅にして人家の地十一町あり、茶店旅ごや多し。いにしへは山崎より架す大橋あつて、其東の橋爪なるを以て橋本といふ。今中之町と号する所橋の渡口なり。山崎橋、延喜式及び文徳実録に出たり。今舟渡となる、これを橋本の渡口といふ〕

金河〔橋本の宿の南端にあり、水源ひがしの渓よりながれて淀河に入〕

金橋〔右の川に架す橋なり、此橋山城河内の堺なり〕

川口天神宮〔男山のひがし十町ばかり、川口村民家の東にあり。祭神天満宮。此所の勧請は、一条院の御宇に宇治の郷士ある夜出て四方を見るに、男山のほとりより光気あつて遥に宇治山の巓を照す、次の夜も又これに同じ。翌日陰陽師に命じて窺ふに、光りのいづる所を得たり、一つの池水より出て光の中に天満神の御像を現ず。是を伝へ聞輩群詣する事竹葦のごとし。遂に天聴に達して宮殿を造り祭祀奉るなり。影現の日は長徳元年乙未五月四日なり。又後花園院の御宇、筑紫安楽寺の僧聖通、天神御自画の影像を持来りてこゝに住す、今なほあり。土人生土神とす、例祭は九月九日なり〕

御池〔宮の辰巳三町ばかりにあり、毎年五月四日出現の祭義をなす〕